

会報

大学生協友の会



2022年2月15日

第33号

発行:大学生協友の会

〒166-8352 東京都杉並区和田 3-30-22 全国大学生協連役員室 TEL 03-5307-1111
 E-mail: unicon@univcoop.or.jp ホームページ <https://unicon.itigo.jp/>



2021年会員親睦会を開催しました

さる12月4日(土) 大学生協杉並会館にてコロナ感染に関する杉並会館の感染ステージに準拠した対策を講じて、オンライン参加を想定したネット環境の整備を施して開催し、実参加で23名、オンライン参加で1名、合計24名の参加で行われました。

1時より開催された幹事会に続き、会員親睦会は2時30分より大学生協会館5階ダイニングルームにて開催されました。伊野瀬幹事長の開会のあいさつのもと、大学生協連中森一朗専務理事より冒頭、友の会会員による「大学生協応援募金」への謝意がありました。上半期を中心に大学生協の近況報告があり、2022年度の事業状況は19年度対比で60%前後の供給高に留まり、利益率の高い事業分野(食品・食堂事業)の供給減で供給剰余の確保が厳しいこと、大教室授業のオンラインの定着によりとりわけ大都市圏の大学の登校率が上昇せず引き続き厳しい状況にあること、大規模生協の損益構造は依然として厳しく、累積債務の克服に向けた対策を進めている旨の報告を頂きました。

その後、齋藤嘉璋さんによる乾杯のあと、7月総会で新幹事に選任された茂垣薫さん、和久井洋一さん、齋藤淑人さんをはじめ参加者からの近況報告をうけて懇親を深めました。宮寺幹事からの中締めのあいさつを受けて散会しました。

東京都連友の会の会員より寄せられた

「大学生協応援募金」の報告とお礼

伊野瀬幹事長が東京都生協連の友の会のみなさまにコロナ禍に伴う大学生協のさまざまな苦境を紹介し、大学生協友の会と同様の応援募金を呼びかけたところ以下の皆様方から支援カンパが寄せられました。(2022年2月8日現在)

濱口廣孝 様 海老澤恵子 様 塩崎佐武郎 様 秋山純 様

大学生協友の会幹事会としても心より感謝いたします。

大学生協と合計して150万6千円の応援募金となりました。

あの時代、あの頃のこと〜私と大学生協 その①

大学生協友の会会員(2001年入会) 仲田 秀



1 生まれと育ち

私は、1940年(昭和15年)栃木県烏山の神社神主の次女として生まれた。姉は終戦後の引き揚げ後に結核で病死、兄二人と全く男女平等に育てられた。父が中国山東省青島の神社宮司への転勤に伴い、3才の時、青島に転居した。5才で終戦を迎え、父は公職追放となった。1945年12月青島から鹿児島港経由で父の故郷山口へ帰還したが、欧州航路の航海士だった父は、引き揚げ船の中で通訳を引き受け、その後県庁などで通訳をしていた。母は文部検定出身の女学校の裁縫の教師だったので、その後独学で身につけた洋裁で洋服の仕立て直しなどをして

家計を支えてくれた。

1947年山口県吉識郡大内村大内小学校に入学、戦後の民主教育でのびのび育ったようだ。5年生の時に山口市立白石小学校へ転校した。その頃父は国学院大学庶務課長に転職し、次兄も都内大学受験のため上京していた。

1953年長兄の大学卒業、私の小学校卒業と同時に、都内中野区へ一家で上京した。区立中野一中を卒業後、都立富士高校に入学、2年の時に山岳部に入部した。高校時代に実家の調布に転居した。

高校では化学、地学が好きで理数コースを選択した。父は、女子大か国学院大学に進めと言いい、物理の先生は「女に物理はむかない」と言う。先生への反発でお茶大の物理と親の勧める国学院国史の特待生を受験した。両方合格したが、父の望む国学院日本史には進学しなかった。

1959年4月お茶の水女子大学物理学科に進学した。内心は山に登りたい一心だった。入学と同時にクラスで役割分担をするとき、何か役に立てる担当をとるの思いで、自治会よ

り地味でおとなしい生協を選んだ。

2 お茶大の頃

【物理学科のころ】

丁度時代は60年安保の真っ盛り、お茶大では生協設立運動の最終盤の頃であった。59年6月に設立

総会が開催され、隣の同窓会「桜蔭会の売店と競り合っていた。お茶大の設立運動に関しては後の大学生協専務理事、コープ東京、日生協の役員である故田中尚四さんが東大生協の理事としてオルグに入っていたことなど学協運動に記載されていた。

1年生の文化祭に父がやって来て、国鉄値上げ反対の立て看板を店の前で一人で書いている私を見て安心して帰り、「あの子は大丈夫だ」と言ったと後で母から聞いた。都庁への生協設立登記に向いたりもしていた。

その頃のことで思い出すことと言えば、自治会室の2/3を仕切った生協の店で、お店を手伝って文房具や10円牛乳を売り、靴下の共同購入をしながら、ほぼ毎日国会デモに行き、高校OB会の仲間と山に登り、ほんの少しだけ授業に出席すると言う毎日だった。

入試が語学以外の科目はほぼ満点に近かった蓄えで1年生の前期・後期試験はなんとか乗り切れたが、それが仇になった。物理を甘くみてし

まったことから、その後の授業についていくことができなかった。生協活動と山登りを両立できたが、自分の物理はノート写しに専念するばかりだった。

山登りは大学2年目になって、男子と女子のペースに差があることを知り、高校OB会仲間の会から女子のペースで登る「女子大山岳部」に籍を移した。山登りを私的に生協を公的に位置づけ、2年、3年は生協の学生専務理事と山岳部のサブリーダーを務めた。

この時代の大学生協は教育環境整備運動を掲げ、文部省に土地建物使用料の免除を要求していた。さらに食堂の水道光熱費も国庫負担を要求し、水光費全額の不払い運動を訴えるかどうかで見解が分かれ、全額不払いかどうかを争点としない大学では学内厚生施設の整備運動が進み、教育環境整備運動として施設拡大運動がさらに発展した。

そんな中で、学生会館があちこちに建てられ、その運営を学生に自主的にさせるべきという運動が起きた。お茶大の学生会館は確か臨時開館の形を取って、学館の喫茶を生協が運営していた。これを通じて、生協はお茶大の業者食堂を生協に移管する足掛かりにしようとしていた。

お茶大の各学科は、物理学科だけ3年から4年への進級にボーダーラインがあった。流体力学に進もうと決意したが、ノートをいくら写しても理解することができなかった。基礎を積み上げる努力をしていなかったため、3年を2回やつても理解できなかった。1年間は親に黙って、山に登り生協の活動を続けた。いよいよ進学が出来ず、親に打ち明けた。大学をやめようかとも思った。

3回目の3年生となる1963年初め、当時の生協理事長から物理が無理なら別の学科はどうか、折角大学に入ったのだから卒業しなさいと提案され、社会教育を学びたいと告げた。

【教育学科のころ】

当時のお茶大は入学時の試験成績によって転部できることを知り、64年4月文教育学部教育学科に転部を決意した。

生協に関わって頂いた二人の物理学科の先生がこのような成績の子を教えらなかつたと悔やんで頂いたが、しかし反発から選んだ学問であつたことが間違いだつたことを痛感した。

親からは騙したのかと叱られ、「山は禁則して、生協も辞めて勉強する」という条件で転部を許可しても

らつた。母は私のために保険の仕事を2年間伸ばしてくれた。教育学科ではよく本を読んだ。東大から講師にいられていた経済史の先生に、春休みに文庫本を100冊読むことを課せられ、夢中になって読んだ。頭が痛くなつて眼科に行つたら、遠視で乱視だと診断され、眼鏡をかけるようになった。

教育学科の時代は家からの禁則を受けていたこともあつて、総代として生協と関わっていた。実際、教育学科の授業も友人たちとの交友も楽しかつた。定時制高校の教師をやるうと考えようになつていた。

4年になつて卒論のテーマを具体的に決める頃、教科書販売所を担当していた、一年後輩で一年早く卒業して生協に残つてくれた仲間が、連合会の経営数値管理担当として移動することになり、先生方もやはり「卒業生が生協にいた方がベスト」と主張されたこともあり、生協運動に専念することを決意した。

1964年夏休みに卒論調査のため、鶴岡生協を訪問し、組織部長宅に1ヶ月寄宿させてもらった。お茶大の山岸さん、鈴木さんの2人の応援を得て組合員へのアンケート調査を行い、「鶴岡生協における家中新町主婦組合員の意識変革について」と題する卒論を書き上げた。鶴岡生協は1955年に組合員の班活動を基礎にして、店

舗を併設する生協として設立された。創立時より「実践によって可能性を切り開く」という考え方を大事にしている、73年灯油裁判、78年ダイエー出店反対運動などをすすめ、生協運動のモデル的存在となつた生協だつた。

鶴岡に滞在していた頃、ベトナムでトンキン湾事件が起こり、その後のアメリカ北爆が始まつたことを覚えていいる。

【食堂の生協移管のころ】

当時お茶大生は、食堂(運営・学校福祉協会)への不満が強く、63年6月総代会で「食堂改善・生協移管」決議をあげた。64年5月学生大会決議も受けて提出した公開質問状に大学側が「生協は学外団体」と回答を拒否したことから、教員が主で、学生も加わつた食堂運営委員会で検討することになった。ところが、現食堂の改善を検討するこの委員会では生協移管申請については議論として、進まなかつた。

そこで、64年12月総代会後、文部省が推奨している「学校福祉協会」を撤退させる視点が重要との判断から、メニューのカロリー計算をして価格設定の不当性を追求する運動化方針に切り替えた(卒論を提出し終えた私も、運動の中に入ることになった)。そこに65年1月、

大学の食堂運営委員会が、カロリー改善などを理由にメニュー価格の値上げを決定したことに学生組合員が憤激した。

クラス討議を踏まえて学生自治会との共闘会議の結成を呼びかけた。

学生大会(480名中380名が参加)は、2月8日から11日までの食堂ボイコットを決議し、試験期間の中で更に、16日からの無期限ボイコットに発展し、学生は弁当持参、生協のパンミルク、喫茶で凌ぎつづけた。遂に3月、3学部教授会が「生協移管」に賛同し、学生の行動を支持することになった。4月新学期を迎え、まだ態度表明を避けていた大学評議会に対して、再度の無期限ボイコットを行い、4月28日評議会にて生協移管が承認され、6月になつて9月生協への移管、営業開始が実現した。6月学生部長との会見で「生協移管」を認め、厨房施設や水光費の一部補助などを勝ち取つた。この運動は、当初から東大生協食堂の主任(当時労組委員長でかつて設立時も店の大工仕事もしてもらつた)の援助を受け、栄養士の協力で、業者食堂のメニュー分析、カロリー分析を行い、生協になればどのような改善ができるのかを訴えることによつて、学生の支持を勝ち取ることができた。(次号に続く)

リタイア後の地域活動

「伏見チンチン電車の会」

2022年1月 谷本 巖



私の住む京都・伏見は、豊臣秀吉の政権が1585年（天正13年）から創始し1603年（慶長8年）まで伏見城にて統治した町で、秀吉の死後徳川家康が江戸幕府を築くまでの間伏見で政権を引き継いでいた町でもありました。明治維新の口火を切った「鳥羽伏見の戦い」（戊辰戦争）もこの地での出来事です。それだけに歴史的な史跡もあり、歴史に関心をもつ区民によりさまざまな活動が行われています。

私が「伏見チンチン電車の会」の活動に関わった経緯は、ある地元メディアに「伏見の歴史に関心がある人集まれ」の記事（1996

年秋）を見てこの会に参加したことです。この日は60名以上の参加者で各自、伏見の歴史に関心のあるテーマを掲げグループに別れて話し合いました。私が参加したグループは天明5年（1785年）、時の伏見奉行の悪政を幕府に直訴した文殊九助ら7人の伏見義民をテーマに話し合いました。その後、同じメンバーで数回の話し合いを持ちましたが、伏見義民は既に御香宮に史跡もあり「伏見義民／顕彰會」も存在しているため他のテーマを模索した結果、日本で初の電気鉄道（チンチン電車／路面電車）が京都（伏見を走った事に注目し、2017年1月に「伏見チンチン電車の会」として5名のメンバー（皆、初対面）で活動を始めることになりました。

この「会」の結成の趣旨

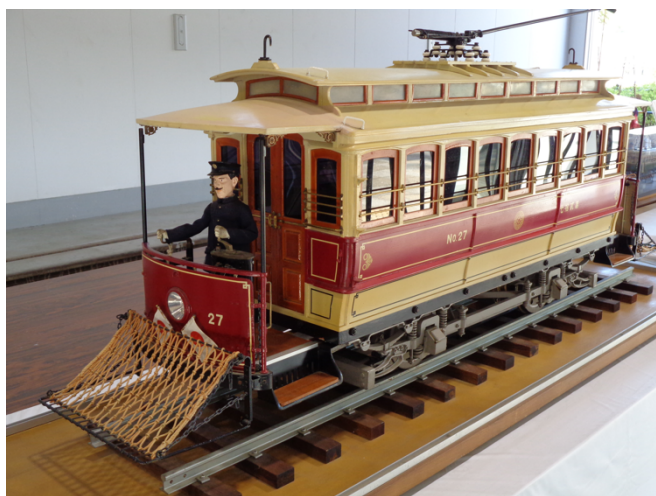
1 日本で最初の電気鉄道（路面電車／チンチン電車）が明治28年（1895）2月1日、京都市（東洞院塩小路）～伏見町（下油掛）に

開通したことを伏見区民を初め多くの人達に知らせ広める事です。

2 同時にこの時代に何故電気鉄道の起点が伏見だったのか？ 電気鉄道を動かすため多くの人たちがこの事業に関わって来たのか？ などその調査・研究をして行くことでした。ご承知のように日本で初めての水力発電が琵琶湖疎水を活用し、明治24（1891）年に京都の蹴上（けあげ）に第1期蹴上発電所が完成しました。この電気動力を活用して京都の地に「チンチン電車」（路面電車）が走ったのです。

「会」結成以降の主な活動

・会の趣旨をまとめたチラシを毎



年7千枚作成し、区役所（支所を含む）、図書館や主だった商店の店頭などに3年間配布しました。

・伏見区役所ロビーで「日本初の路面電車（チンチン電車）が伏見―京都間を走った事を知ってますか」のパネル展を3年続けて開催（2017年、2018年、2020年）をし、知らせる活動を継続しました。

・調査・研究を深まるための公開学習会（2回）を開催し、伏見の鉄道の歴史や江戸時代から明治の人流・物流の拠点として発展してきた伏見の歴史について学習しました。

・映画「明日をつくった男 田辺朔郎と琵琶湖疎水」の上映とパネルディスプレイ（2018年）で琵琶湖疎水の敷設の経緯と完成後の活用について学習しました。

・「梅小路公園」の市電展示室に展示されていた実物の8分の1の電車模型を修理し、走行可能にして「会」が参加するイベントで活用しています。

・京都市が行った「明治150年京都のキセキ」の企画、梅小路公園「グリーンフェア」に子供たちにも関心を持つためらうため路面電車のペーパークラフトを「会」が独自開発し、ワークショップで子供達の参加で「チンチン電車」を知ってもらおう活動をしました。

・オリジナルTシャツを作り販売もしています。

これらの活動をするための運営資金は伏見区の地域活動推進のための援助金制度を活用し賄うことができた。(今は京都市の財政危機で制度の廃止)

今後の活動の焦点は、「チンチン電車」の産みの親、京都電気鉄道株式会社(京電)を設立し京都での路面電車の敷設と営業を政府に申請、京都市全域に路面電車を走らせた高木文平について注目しました。高木文平は京都の渋沢栄一と言っても過言でない人物で、明治維新後、地元(京都府南丹市神吉)に小学校の設立や灌漑施設(長池)を造り農業の促進に寄与しました。1882年には京都商工会議所を設立し初代会長を勤め、さらに1888年には田邊朔郎と米国を視察(ボストン、コロラド州アスペン)し、電気鉄道と水力発電を見聞しました。帰国後、琵琶湖疎水の利用目的を水車動力から水力発電に切り替えることに貢献しました人物です。高木文平を知らせる活動を計画した矢先にコロナ禍に直面し、2年あまり活動を中断することとなりました。

「会」のメンバー5名はそれぞれ特技があります。宣伝物を作るのがうまい人、自動車関係に豊富な知識を持ち先輩が造った電車模型を管理している人、伏見深草の歴史や事情に詳しい人。情報機器や鉄道事情に詳しい人。

話し合いの内容を議事録にまとめまとめる人(私)。それぞれの特技を活かしながら息の長い活動をしていきたいと思っています。



2022年度第1回大学生協友の会幹事会報告

日時…2021年12月4日(土) 13:30~

場所…大学生協連杉並会館

実出席…伊野瀬、岡安、宮寺、釜田、平田、中村、柴田、説田、齋藤、和久井、茂垣、藤村、大久保(幹事)和知(会計監査)

欠席…山崎、薄葉、馬場、柳ヶ瀬、塩谷、倉橋(幹事)古越(会計監査)

報告事項

1) 幹事近況報告

2) 大学生協近況報告

3) 前回以降の会員及び他大学生協の会など

4/25第1回友の会オンライン交流会 以降5/30、7/25、8/28、9/25、10/30と開催。

4) 事務局活動

10/27事務局会議(会報・親睦会開催案内)

5) 会員情報(総会以降12月4日迄…265名)

協議事項

1) 友の会会報定期発行日の変更について

友の会オンライン交流会の土曜開催に伴い、会報発送に伴う事務局会議と重なる場合が多いことから、会報の発行日をこれまでの1日から15日に変更する。

2) 友の会会報次号(2022年2月15日)発行計画

3) 2022年度友の会総会特別企画

大学生協の経営再建に向けた取り組み報告をベースに検討する。

4) 2022年度大学生協友の会総会日程

7月2日(土) 午前11時開会 懇親会は13時開会

5) 2022年第12回会員親睦会日程

12月3日(土) 13時開会

6) 2021年度第11回親睦会当日運営次第

7) 2022年第2回幹事会(単独開催)開催日時

4月9日(土) 13時開会

8) その他

以上協議確認した

〈会員の活動紹介〉

明治の購買組合から職域生協へつづいた協同組合の二つの源流の地

日光・足尾に購買組合ができた背景を考える その①

大学生協友の会会員(2021年入会)・幹事・齋藤淑人



以前から足尾に生協売店があるのは知っていたが、解散したのは知らなかった。しかも、百年以上続いた組織で、日本の協同組合史にもその名が残る生協であった。現在も一部の生協店舗の建物はまだ残っており、古河足尾歴史館には生協関係の展示物もある。

明治時代の産業組合や欧州使節との関係、日光・足尾の協同組合の源流についての一つの考察である。

日光市は私自身の故郷でもあり、市域に大学生協協定宿舎が十軒ほど存在する。昨年、退職後、久しぶりに足尾に行ってみた。栃木県西北部の足尾といえば「鉰毒事件」のイメージが強いが、かつて三万人が暮らしていた鉰都で、そこには日本でも有数の職域生協があった。銅山閉山とともに過疎化が進み、市町村合併で日光市の一部となった。現在、足尾地区の人口は一六〇〇人まで減少している。

足尾銅山「三養会」は古河鉰業により一九〇八(明治41)年に開設された購買組合で、明治から平成まで百年近く続いた協同組合である。二〇一六年の解散時までは日本で一番歴史の長い生協だった。同じ古河が創業した日光精銅所にも同時期に購買組合ができていた。一九〇六年、奥日光と足尾の分岐点の清滝に、足尾銅山などで採掘された粗銅を精錬する日光精銅所が建設される。ここは足尾より一年早く一九〇七年に購買組合が開設された。(なお、足尾の購買組合準備会は一九〇六年に発足している)なぜ、足尾や日光に購買組合ができたのか、文献や史料を探っているが、

現時点での調査報告である。
貨物列車も動かした足尾銅山生協

昨年十一月に大学生協のOBや生協総研の方とともに、足尾銅山生協の最後の専務理事であった高橋栄一氏にインタビューしてきた。(内容は日光市の資料にあるものとはほぼ同様のため主要部分を省略する)昔から銅山では「貸下げ」(下がり)制度があり、米、味噌、醤油等生活必需品を掛け売りしていた。鉰業所は食料や日用品などを倉庫品として一括購入し、それを鉰夫たちに「貸下げ」した。つまり、従業員に通帳(貸下品請求帳)を渡し、代金を給与天引する形であった。この点で、足尾には購買組合と生協の土台となるものがあった。

七〇年代には、会社が濃硫酸を足尾駅で積載し出荷することになり、足尾駅からの運搬業務を生協に委託された。実際に専用貨車(コタキ型)で桐生や伊勢崎まで運んでいた。これは足尾線の貨物輸送取扱廃止まで続いた。また、理事会で鶏卵の生産が決議され一万羽の養鶏や養豚も行ったという。大学の要請で「特注」事業が業務委託される大学生協にどこか似ている。やはり会社側の要請は断りにくいらしい。

遣欧使節と「職工市街」のモデル

幕府直轄の足尾銅山は明治維新後、古河市兵衛が所有するが、一時、渋沢栄一も経営に参加した。大学生協で「テーマのある旅」を担当していたこともあり、幕末・明治維新期のテーマのある旅(？)渋沢らの渡欧記録にも興味を持った。幕末から明治維新期に多くの使節団が長期の欧州視察をしている。彼らは蒸気機関などや先進機械工業、進んだ社会諸制度に接し、日本との違いに驚愕する。

(次号に続く)

戦後、足尾と日光の購買組合は生協法人化され、大手職域生協の「五社会」(互社会)に属し、職域生協としてトップクラスの供給を誇った。「足尾銅山概要」(古河鉰業・一九七二)によれば、当時の生活協同組合三養会は、組合員数一八五〇名、従業員百名、店舗九ヶ所、年間取扱高約七・六億円、出資金四九五〇万円であった。生協理事は主に銅山労組から選出され、理事長には労組の委員長がついた。高橋氏は古河鉰業に採用されたが、戦後の生協法ができた直後で、生協に配属された。